

# No.46 ゲオルギー・チャプカノフ —無題—

Georgi Tchapkanov

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 8月1日付 立川市市報記事より

ゲオルギー・チャプカノフはブルガリアの大学教授で、彫刻を教えている。東欧の大作家は、具象的な作品も抽象的な作品も何でもこなせるし、仕事は早い。

彼のデッサン力は恐るべきもので、これは、日ごろの不断の訓練の結果だろう。昨年亡くなったイタリアの映画監督、フェデリコ・フェリーニは死の間際、チャプカノフに自分の肖像彫刻を頼んで、これが素晴らしい出来栄えだった。

彼は立川では、かつてこの地域で使われた古い農機具の部品を使って、ここにいたであろう、馴染みのある3匹の動物(犬・羊・馬)を作った。農業で暮らしたわれらの祖先の記憶を蘇らせたのだった。

しかし彼の頭にある動物たちは、ヨーロッパの動物だった。愛嬌<sup>あいぎょう</sup>というしかない。

作家のメッセージ / 日本住宅公団(現:UR都市機構)「ミニ通信」より

立川の印象

明らかにここはひとつの中心、シンボルであります。

巨大ビルや対人関係につきもののストレスのない、自然や空気や空と調和した、気高く完全な人間存在への新しく豊かな希求の中心。

世界上の多くの地で実現された他の都市計画が最大最高のものであろうという尊大な野心を抱いていたのとは異なり、ファーレ立川の建物の規模は極めて適正であり、人間的なものになっています。

注意深い作家選定の結果、立川の住民は大きさも形も様々なアート作品と直接出会うことが可能となりまたジャンルの見事な選択は思考や美的基準の枠を広げるきわめて重要なプロセスとなっています。それは人間性が完全に生き残るための一つの方法であると思います。

形体や技法の豊かさ、作品の置かれる場所は、見るもの一住人の想像力を刺激し、その場所につながっているという感覚やくつろぎを持った特殊な雰囲気<sup>ふんいき</sup>に引き込むことになります。

以上が、立川とそのまちづくりから受けた私の印象です。